

『奥の細道』の世界を迫体験し「伝統的な言語文化」に親しむための VR教材の開発

Development of a VR Teaching Material to Get Familiar with Traditional Language Culture through Reliving “the Narrow Road to the Interior [Deep North]”

新村涼一, 八木雄一郎, 森下孟
Ryoichi NIIMURA, Yuichiro YAGI, Takeshi MORISHITA
信州大学
Shinshu University
Email: 16e1017f@shinshu-u.ac.jp

あらまし：「伝統的な言語文化（古典）に親しむ」学習指導では学習者とテキストの時間的な隔たりを埋めていくことが課題となる。「学習者が古典に近づくこと」「古典を学習者に近づけること」、両者が相補的に働くことが、「伝統的な言語文化に親しむ」ことにおいて肝要である。しかし従来の実践では、これらは別種の活動として分断され、相補的な働きが十全になされてきたとは言えない。そこでその相補性を高めることを企図したVR教材を開発した。

キーワード：伝統的な言語文化に親しむ 迫体験 VR教材 奥の細道

1. 問題の所在

平成14年度、平成17年度教育課程実施状況調査において、70%以上の高校生が古典に苦手意識を持っていることが明らかとなり、「高校生の古典嫌い」が現在の古典教育の問題点として認知されるようになった。これを解決するためには、中学生の段階から古典に親しむことが必要である。すでに中学生の段階でおよそ50%が古典に苦手意識を持っていることが明らかになっており、しかも、その「古典嫌い」の理由は、坂東⁽¹⁾、岩崎⁽²⁾によって中学生と高校生とで共通することが明らかにされている。

2. 「伝統的な言語文化に親しむ」

こうした現状を受けて、小学校・中学校では平成20年度版学習指導要領以降「伝統的な言語文化に関する事項」が新設され（高校では平成22年度）、「古典に親しむ」ことが目標として強調されるようになっている。

「伝統的な言語文化に親しむ」とはどういうことか。高橋・渡辺⁽³⁾は、「一人の読者として時間を超えて作品世界を体感する」としている。「迫体験」と言っていいたろう。学習者と古典の間には時間的な隔りがあり、その解消の必要性を高橋・渡辺は訴えている。筆者は「迫体験」によって時間を超える方法は2つあると考えている。「学習者が古典に近づく」「古典を学習者に近づける」である。

2.1 「学習者が古典に近づく」方法

この方法については、時枝⁽⁴⁾や小山内・楠見⁽⁵⁾らの論を集約したところから導かれる。時枝は、言語を表現行為そのものであり、理解行為そのものであるとしている。そして、古典教育の目的を、先哲がどのように表現し理解したのかを読み取ることを通して、自己のアイデンティティ形成の所以を読み取る

こととしている。一方小山内・楠見は、心理学の観点から物語に「没入」することの効果について明らかにしている。物語に「没入」し物語世界のイメージ（状況モデル）を形成することが、物語の理解を深めるとともに、自己意識や態度、信念の変化を促すとしている。これらは、テキストから「読み取る」という点で共通しており、このことから「学習者が古典に近づく」（以下「没入」）であると言える。

2.2 「古典を学習者に近づける」方法

この方法については、渡辺⁽⁶⁾や竹村⁽⁷⁾らの論を集約したところから導かれる。渡辺は学習者が主体的・創造的に古典を価値づける必要性を説いており、現代の教育には読み手が古典を意味づける「関係概念」としての古典教育が重要だとしている。この「関係概念」としての古典教育には、「主体的な解釈、批評を行い、価値を発見」する「内化」が必要不可欠であるとしている。古典を「内化」させていくための働きかけとして、単元終末に教師から学習者に、「あなたにとってどんな意義がありましたか」という問いかけなどが挙げられている。また竹村は、「伝統的な言語文化に親しむ」という言葉の意味から、その目指すべき方向性を示唆している。特に「伝統」を「継承する人々によって常に更新されるもの」としている。これらに共通するのは、古典を現代の価値観に捉えなおすための取り組みであり、「古典を学習者に近づける」こと（以下「内化」）と言える。

2.3 「没入」・「内化」の連環

「迫体験」を促進するためには、「没入」と「内化」の連環が不可欠であると考えている。渡辺⁽⁸⁾は、「内化に至る過程で、読みに必要な力を身に付けた学び手を育てる」「批評によって価値づけ豊かな学びに向かう知のエネルギーとして身心に根付かせていく」

と述べている。このことは、「内化」が確かな読解がもたらす「没入」によって導かれ、「内化」がさらなる「没入」を導くエネルギーとなると捉えることができるだろう。

そしてこの連環について、筆者は「奥の細道」の36の実践記録を収集し、授業内での教師の問いかけや用いた教材などを「没入」「内化」のどちらに当てはまるか分類し、それらから両者の連環がどのように行われているのかを考察した。

その結果、多くの実践の中で「歴史的背景の確認」や「古人のものの見方・考え方」を考える活動によって「没入」がなされるとともに、そこでの読解を前提として、表現に対する評価を下す「内化」が行われていることが明らかになった。その一方で、「没入」と「内化」が学習活動において分けられていることが明らかになった。

2つの活動を相補的に行うことが可能であれば、古典世界をより深いレベルで「追体験」することができるのではないだろうか。

3. VR教材

「没入」と「内化」の連環をより密接なものにするために、筆者はVR (Virtual Reality) 教材を用いることを考えた。VRが他のメディアと比較して優れている点は、それがもたらす「没入感」にある。VR教材によって古典に「没入」しながら、学習活動によって「内化」を促すことで、両者の連環はより密接なものとなり、「伝統的な言語文化に親しむ」学習が促進していくと考えている。

3.1 教材概要

今回、「奥の細道」の世界を追体験する教材として、図1を開発した。

本教材は「夏草や兵どもが夢の跡」が読まれた岩手県平泉町高館の現在の様子を撮影した動画である。撮影日は曇天だったため、編集によって晴天の画像に差し替えた。本教材を用いることで、学習者は、高館の広さや北上川の様子を知り、状況モデルを形成するとともに、VR教材とテキストを比較することにより、テキストの内容について、記述の正しさや表現方法の良し悪しを評価することができる。

3.2 「没入」・「内化」をつなげる問いかけ

前述の通り、VR教材の強みは「没入感」にある。故に、「追体験」を可能にするためには、学習活動において「没入」「内化」を連環させる必要がある。

そこで筆者は、高館で芭蕉と曾良がどのような会話をしたか想像し、劇にする活動を提案する。この活動は、教科書教材読解後、VR教材視聴後の2回行うものとする。

この活動で期待されるVR教材の効果は次の通りである。

一つ目は、「奥の細道」への「没入」を促進するこ

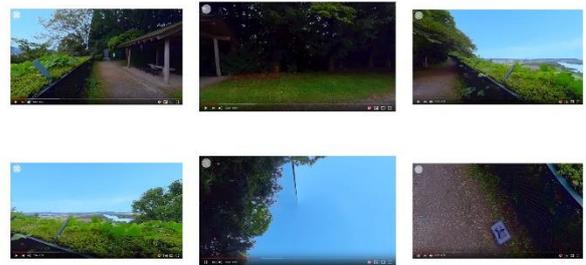


図1 VR教材「奥の細道」の例

とである。本教材を視聴することによって、学習者は高館の広さや下を流れる北上川の様子などを知ることができる。それによって本文よりも明確で概ね共通の状況モデルを形成することができる。

二つ目は、「奥の細道」の「内化」を促進することである。本教材を視聴して芭蕉と曾良の会話を想像する活動は、地の文と俳句との関係から芭蕉の心情を考察することである。それは、「没入」であるとともに、芭蕉の表現を評価することにつながるため「内化」の活動であるということが出来る。また、仮に劇を教室内で相互評価する場合、共通理解に基づいた意見交換が行われるため、他者の解釈の確認のために再びVR教材を用いた「没入」へとつなげることもできるだろう。

このように、VR教材を用いることで「没入」「内化」のより密接な連携のもと「追体験」を行うことが可能となり、学習者はより「伝統的な言語文化に親しむ」ことが期待される。この授業実践を通じて、VR教材の効果を検証することが今後の課題である。

謝辞

本研究はJSPS 科研費 JP17H04707 の支援を受けて実施されたものである。

参考文献

- (1)坂東智子：“中学生の古典学習観に関する一考察—平成21年実施のアンケート調査を手掛かりとして”，教育実践学論集，第56巻，第2号，pp.83-95(2010)
- (2)花田修一，岩崎淳編：“伝統的な言語文化の学習指導事例集3 古文・漢文を中心とした学習指導事例集”，明治図書，東京，pp.20-30(2011)
- (3)高橋邦伯，渡辺春美：“シリーズ国語授業づくり中学校古典—言語文化に親しむ—”，東洋館出版，東京(2018)
- (4)時枝誠記編，“時枝誠記国語教育論集I”，明治図書，東京，pp.92-94(1984)
- (5)小山内秀和，楠見孝：“物語世界への没入体験—読解過程における位置づけとその機能—”，心理学評論，第56号，第4巻，pp.457-473(2013)
- (6)渡辺春美：“「関係概念」に基づく古典教育の方法—古典活性化のための基礎論として”，溪水社，広島(2018)
- (7)竹村信治：“伝統的な言語文化”の掘み直し—古典研究の立場から—，国語科教育，第71巻，pp.5-6(2012)
- (8)渡辺春美：“「内化」に導く伝統的な言語文化の授業”，月刊国語教育研究，No.573，p.1(2020)